

社会人活用した意義ある学習体験を提供する授業設計と省察

嵯峨山和美, 斉藤隆仁
徳島大学全学共通教育センター

1. はじめに

近年, 大学において, 学生の主体性を育成することを目的とする正課教育や正課と正課外教育との連携により, 学生を能動的な学習へ動機付ける様々な取組が試行されている. 徳島大学全学共通教育センターでは, 正課授業に社会人の視点と学生の視点とを取り入れた教育改革を実践している. そこで, 本取組の一環として平成 21 年度後期に新規の授業を開講することとなった.

ここでは, Fink(2003)の意義ある学習のための授業設計^①と, 土持(2009)の省察的記述であるラーニング・ポートフォリオ^②とを参考に, 社会人を活用した新規授業の設計を行ったので, その過程と省察について報告する.

2. 授業の概略

本授業は, 社会人を活用する教養科目(全 15 コマ, 90 分/コマ)として計画され, 教養科目群のうちの「自然と技術」に属する. 授業題目はあらかじめ「アクティブラーニングで環境から科学を考える」と設定していた. その後, 「持続可能な開発のための教育(ESD: Education for Sustainable Development)」の理念を織り込んだ.

3. 授業設計の手順

Fink の「意義ある学習を目指す授業設計のための自己管理用手引き」^①から 12 ステップをそれぞれの項目ごとに順追って忠実に計画した.

以下, 主な内容を抜粋する.

3・1 設計の初期段階: 強固な主要要素の構築

ステップ 1. 重要な状況要因の確認

主題は, ESD の理念の導入であり, 理論と実践との組み合わせとした総合分野とする. 学生は, 小・中・高校での各教科と総合学習, 部活動, 課外活動, 地域社会活動などを含む学習経験から, それぞれの知識は得ている. しかし, それぞれの学習のつながりや関連性については, 理解していないと思われる.

ステップ 2. 重要な学習目標の確認

現代社会の課題について, 一人ひとりが世界の人々や将来世代につながり, 環境(自然環境だけではなく, 社会環境, 人間環境等)との関係性の

中で生きていることを認識する. また, 単なる知識の習得にとどまらず, 自分とは異なる考え方の他者とかかわり合いながら多文化共生社会の構築を目指し, 自分の役割を考え, 自分なりの考えを持って行動できる人になるよう, 互いに学び合うこととする.

ステップ 3. 適正なフィードバックおよび評価手順の作成

毎回, 授業の要点の抽出と再構築のために, レポート提出を課す. そして, 次週の授業冒頭でレポートの内容を取り上げ, 助言をする.

ステップ 4. 効果的な授業/学習活動の選択

能動的学習の全体像を示す(図 1). 社会人の参加を中心に, それぞれの調和を図ることで相乗効果を創出する.

ステップ 5. 主要要素が統合されていることの確認

授業の中間に「振り返り」授業を導入し, 学習目標を再確認する. また, レポートや課題, 宿題等により文章化することで, 学習目標を整理する.

3・2 設計の中間段階: 主要要素を一貫性のある総体として組み立てる

ステップ 6. テーマに沿った授業構成の作成

- ① 環境問題を世界の経済活動の視点から複合的, 複雑的な課題として捉える(擬似体験ゲーム, KJ 法, ブレーンストーミング).
- ② 身近なものから自分と世界の諸問題とのつながりを知り, 考える(携帯電話, パーム油, 理数科教育, 仮想水, 家電製品等).
- ③ 持続可能な社会づくりのための実践活動に触れ, 自分の周りの課題に気づき, 行動できることを考える(学外授業や見学, 宿題).

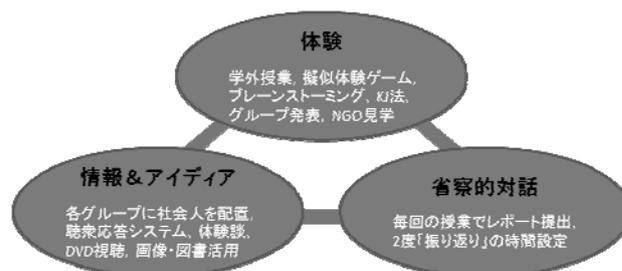


図 1. 能動的学習の全体像

ステップ 7. インストラクショナル方略の選択あるいは策定

学生 5 名の各グループに、社会人 1 名を配置し、社会人の視点や経験から助言をお願いします。また、宿題を活用して授業の流れを補足、強化する。

ステップ 8. 学習活動の全体的計画作成のために授業構成とインストラクショナル方略を統合

- ①前半：身近なものから、自分と世界の諸課題とのつながり、関連性に気付く。
- ②中間：先進国の科学技術発展の恩恵と問題点、そして責任とについて考える。
- ③後半：多様な環境問題を通して、共生社会への実現を意識する。地球市民として自分の役割を位置づけ、自分なりの考えを持って行動できる人になるよう学び合う。
- ④最終：小論文をまとめ、発表する。

3・3 設計の最終段階：残っている重要な作業の完成

ステップ 9. 成績評価システムの確立

出席点 1 割、毎回の授業レポート提出 2 割、宿題 2 題 2 割、省察（中間振り返り、最終振り返り）2 割、最終小論文・発表（採点）3 割とする。

ステップ 10. 想定可能な問題の発見・修正

社会人配置、グループ編成、教材、課題の選定等を吟味し、アプローチを工夫する必要がある。休日となる学外授業への学生の参加は可能であるかを検討する。NGO 見学先の探索を行う。

ステップ 11. 授業のシラバス作成

ここでは、省略する。

ステップ 12. 授業内容および指導の評価を計画

授業のレポートや宿題から、個々の学生について把握するよう努める。また、2 度の省察から個々の学生の成長度や理解度を観察する。

3・4 省察

「大学生研究フォーラム 2009」の土持と岩崎との資料からラーニング・ポートフォリオ作成を検討した^②。特に、岩崎は学生の視点から「学習プロセスを省察し文章化することで学習内容の復習にとどまらず、そのとき自分が何に疑問を感じ、どのように解決したのかを振り返ることがで



図 2. 社会人とともに考える授業風景

きた。また、大学生として何をどのように学んでいくかを改めて見直すきっかけとなった。自分の学習スタイルの見直しにもつながり、これからの学習スタイルを改善していくことにも大いに役立った。能動的に学ぶことは自分の可能性を広げてくれる」と述べている。

そこで、毎回の授業で「今日の授業で何を学んだか」を中心にレポートを課すこととした。

授業の中間と最終とに「振り返り」のための授業時間を確保し、過去の授業で提出されたレポートをすべて学生個々へ返却し、省察を実施した。同時に、学生と社会人とに授業に対する自己評価アンケートと授業評価アンケートとを実施した。

4. おわりに

本授業設計に基づき、医学部 11 名、歯学部 1 名、総合科学部 6 名、工学部 12 名の学生計 30 名と社会人 6 名が履修した。できるだけ学部の異なる学生 5 名と社会人 1 名の計 6 名のグループを編成し、グループ単位を中心として授業を実践した。

学生の社会人参加に対する評価は、「学生では気付かない視点からの意見が得られたので、格段に視野が広がった。」「世代の異なる人の意見を聞くことのできる機会なのでこれからも続けてほしい。」「社会人は、自分の考えをはっきり言えてすごいと思った。」などである。グループ学習では社会人との距離が近いので、学生は授業ごとに有益な社会経験談に接することができたようである。また、社会人も「学生を通じて大いに学ぶことができた。」と述べている。

学生の省察では、「振り返りの時間に、考えながら文章を書いた時は、頭の中や思いが整理できてスッキリしました。」と記載されていた。

授業全体を通じて、学生は主題である ESD の概念から「全ての物事にはつながりがある。」ことに気付いたようである。このつながりを他の授業や今後の学びに派生するものと期待したい。

謝辞

本取組は、平成 21 年度質の高い大学教育推進プログラム（文部科学省）の援助によるものである。

参考文献

- (1) L. Dee Fink, *Creating Significant Learning Experiences: An Integrated Approach to Designing College Courses*, Jossey-Bass, 2003, 土持ゲーリー法一監訳,
（川野卓二, 徳島大学・SPOD 平成21年度第1回「FDとくときセミナー」配布資料）
- (2) 大学生の何が成長しているか、その中身を考える「大学生研究フォーラム2009」資料, 財団法人電通育英会, 2009年7月, 京都